

— 原著 —

舌痛症の臨床的検討

— とくに背景因子と治療効果の関係について —

野村 務, 岡田 朋子, 古川 達也, 加納 浩之, 中島 民雄

新潟大学歯学部口腔外科学第一講座
(主任: 中島民雄教授)

Clinical study of glossodynia

— Relationships between background factors and treatment outcome —

Tsutomu Nomura, Tomoko Okada, Tatsuya Furukawa,
Hiroyuki Kanoh, Tamio Nakajima

First Department of Oral and Maxillofacial Surgery, School of Dentistry, Niigata University.
(Chief: Prof. Tamio Nakajima)

キーワード: 舌痛症 (glossodynia), CMI, 治療効果

Abstract

Clinical features and the results of the correlation analysis between background factors and the effects of the therapy of 6 males and 16 females with glossodynia were described. Their mean age was 56 years. Fourteen patients had no job. Cardiovascular, gynecological and gastrointestinal diseases were often recorded in the anamnesis. Nine patients had been under chemotherapy, mainly because of hypertension. The period from the onset of symptoms to the visit to our hospital exceeded one year in 59 % of the patients. They had visited 1.5 facilities previously on the average. Most of them complained of sore or burning sensation of the tongue with or without fluctuation. Other frequently encountered symptoms included xerostomia, sore lip, gingiva and buccal mucosa, and altered taste sensation. Anxiety, insomnia and psychological stress were often noted.

In the analysis of correlation, the patients age was related to the treatment effect.

Six patients were graded as III or IV in the CMI test. VAS score was related to the grades of CMI and depression. The treatment consisting of simple psychological approach, chemotherapy with minor tranquilizers and consultation with psychosomatists resulted in the decrease of VAS score from 63 to 15 and was judged as successful in 96 % of the population.

和文抄録

男性6名, 女性16名の舌痛症患者の臨床的特徴とその背景因子と治療効果の相関関係について報告した。平均年齢は56歳であり, 14名は無職であった。既往歴では, 循環器疾患, 婦人科疾患, 消化管疾患が多かった。9名はおもに, 高血圧のために薬物を服用していた。来院までの期間は1年以上が59.1%であり, 平均1.5の前医療機関を受診していた。症状としては舌のヒリヒリ, ピリピリが多く, 日内変動はあるものとなないものがあった。その他の愁訴としては, 口腔乾燥, 口唇・歯肉・頬粘膜痛, 味覚異常があった。不安, 不眠, ストレスもしばしば認められた。

各因子の相関では, 年齢と治療効果に相関を認めた。CMIでは6名でIII群またはIV群であり, CMIと抑うつは初診時のVAS値と統計学的に相関を認めた。治療は簡易精神療法, 抗不安剤等の薬物療法, さらに心療内科との対診を行い, VAS値は平均63から15へ減少し, 96%に有効と判定された。

緒 言

舌痛症において心身医学的関与が広く認められているが、背景因子や心身医学的特性と治療効果の関係について検索した報告は少ない。

そこで今回我々は、舌に器質的変化を認めず、慢性持続性に疼痛を訴える舌痛症患者について、臨床所見、背景因子および心理テスト (CMI) 結果から舌痛症の病態を精査すると共に、疼痛に対する段階評価を行い、背景因子および心身医学的特性と治療効果との関係について検討した。

対象および方法

対象は当科で舌痛症と診断され、治療効果の判定可能であった22名である。診断基準は「舌に器質的変化を認めず舌に疼痛を訴える患者」¹⁾とした。診断にはプロトコールおよびアンケートを使用し、性別、年齢、職業、既往歴、嗜好、最終学歴、当科来院までの期間 (病悩期間)、症状としては疼痛感覚、舌病変、その他の愁訴、痛恐怖・不眠等の心理状態、心理テストとしてはCornell Medical Index (CMI) テストを施行した。さらに治療効果についてはvisual analogue scale (VAS) により、VAS 値が0になったものを著効、VAS 値が初診時より低下したものを有効、VAS 値の変化が見られなかったものを無効とした。これらをもとに、初診時VAS 値、病悩期間、学歴、治療効果およびCMI の関係について検討した。統計処理は回帰分析およびstudent-t test を用いた。統計処理にあたって学歴は小学校卒から大学卒まで1から4段階に評価し、CMI は各領域を1から4とし、治療効果については、著効を1、有効を2、無効を3として統計処理を行った。

結 果

1. 性別と年齢

性別は男6名、女16名であり、女性に多かった。年齢は30-75才で、平均56.2歳であった。

2. 職 業

職業は、無職が14名と多く、他に常勤7名、非常勤1名であった (表1)。

3. 既往歴と合併症

既往歴は、循環器、婦人科、消化器疾患が多かった (表2)。また、9名は常用薬を服用しており、高血圧に対するものが多かった。

4. 嗜 好

嗜好は、男性5名に飲酒、4名に喫煙が見られたが、

表1 職業

職業	患者数
無職	14
常勤	7
会社員	3
教員	1
自営業	1
公務員	1
保母	1
非常勤	1

表2 既往歴と合併症

疾患	患者数
循環器疾患	11
婦人科疾患	7
消化器疾患	5
アレルギー性疾患	4
耳鼻科疾患	3
泌尿器疾患	2
整形外科疾患	2
眼科疾患	2
内分泌疾患	2
呼吸器疾患	1
脳血管疾患	1

女性では1名もなかった。

5. 最終学歴

最終学歴は小学校、中学校、高校が5-7名ずつで、大学卒は3名と少なかった。

6. 病悩期間

病悩期間は、1年以内が9名、他は1年以上で、3年以内が7名あり、病悩期間が1年以上が59.1%をしめていた。当科受診前の医療機関は、複数施設を受診していることが多く、平均1.5施設であった。前医は耳鼻科が15名、歯科が14名と多く、内科は3名で、投薬などを受けていたが効果はなかった。

7. 症 状

舌痛部位は、側縁が20名、舌尖が15名と多く、中央は8名、舌根は1名であった。舌痛の感じ方としては、ヒリヒリ、ピリピリが20名あり、他にビーン、ビリビリ、しびれるような感じが各1名あった。日内変動として、変化のないものが8名、変化のあったものが14名で、特徴的な所見は得られなかった。舌痛以外の口腔内の愁訴として、口腔乾燥 (14名)、口唇・歯肉・頬粘膜痛 (6名)、味覚異常 (3名)、口腔内違和感 (3名)、口臭 (1名) が見られた。

8. 心理状態

初診時の心理状態では、ほとんどの症例で不安感 (17

名)が認められ, さらに不眠(7名), 癌恐怖症(7名)も多く見られた。ストレスは, アンケートにて3名であったが, 頻回の間診にて家庭環境に悩みをもっている患者が9名あった。また, 発症のきっかけとして, 抜歯などの歯科治療が関連していると思われる者が5名あった。

CMIは, ほぼ正常のI領域, II領域が9名と7名で, 神経症的傾向があるとされるIII領域以上のものが6名認められた。

9. 治療法と効果

治療としては, 初診時より簡易精神療法を行い, 抗不安剤などの薬物療法, さらに必要な場合, 心療内科との対診を行った。治療前のVAS値の平均は 62.5 ± 17.7 であり, 治療後は 14.8 ± 14.7 で有意に低下していた(図1)。効果判定では著効は9名, 有効は12名, 無効は1名で有

効率95.5%であった。

10. 背景因子, 心身医学的特性と治療効果

年齢, 病悩期間, 学歴, VAS値, CMI, 治療効果の相関関係についてみると, 治療効果に及ぼす影響としては, 年齢において, $R^2=0.205$, $P=0.034$ で強く関与していることが示唆された(表3)。また, CMIと初診時のVAS値の間ではCMIの領域が高くなるほど, VAS値の有意な上昇が見られた(図2a)。CMIの各項目をさらに詳しく検索し, 不適応, 抑うつ, 不安, 過敏, 怒り, 緊張のスコアとVAS値の相関を見てみると, 抑うつとVASの相関が見られ, 統計学的に抑うつが高度なほど, VASが高値を示した(図2b)。

考 察

原因不明の舌の疼痛を訴えて, 外来を受診する患者は多く, 治療に難渋するケースが多い。今回は, 最近3年間に受診した患者にアンケートを行い, その病態の解明と治療効果について分析した。

背景因子についてみると, 性差では1:3.2と女性に多く, 平均年齢も56.2歳と高齢で, 永井ら¹⁾, 小野ら²⁾の報告と一致していた。職業は年齢が高いこともあり無職が多く, 高齢の主婦が多かった。既往歴・合併症では, 多くの疾患を有しており, 特に高血圧を主体として循環器疾患が多かった。多くの患者で投薬がされており舌痛症への影響が考えられたが, 今回は合併症を優先し投薬の中止は行わなかった。

来院までの期間では, 13名が1年以上であり, 慢性に経過していることが考えられた。舌痛の感じ方としては, ヒリヒリ, ピリピリといった訴えが多く, 永井ら³⁾とほぼ同様であった。しかし, 初診時のVAS値は平均62.5で, 100の患者が4名おり, 患者自身の苦痛は非常に高度であることが示された。また疼痛の日内変動では食事, 仕事で増悪する患者やその反対に軽快する患者もあり, 一定の傾向は認めなかった。舌痛以外の愁訴では口腔乾燥が多く見られ, これは加齢の影響, 降圧剤の服用なども影響しているものと思われた。さらに舌痛症患者では口唇, 歯肉などにも疼痛を訴える患者が6名おり, 同一

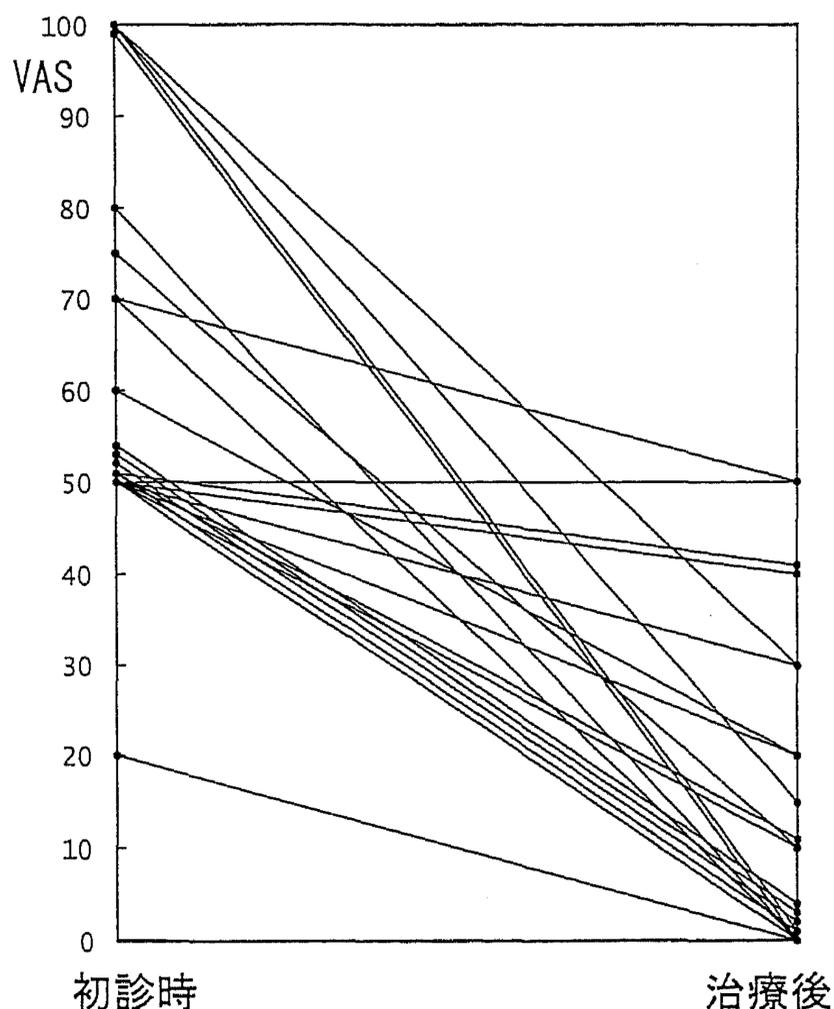


図1: 治療によるVAS値の変化。1例を除いて, 治療後にVAS値の著明な低下を認めた。

表3 各因子間の回帰分析結果(P値)

	年齢	病悩期間	学歴	VAS値	CMI	治療効果
年齢	-	0.074	0.086	0.159	0.658	0.034
病悩期間		-	0.135	0.48	0.447	0.135
学歴			-	0.326	0.128	0.866
VAS値				-	0.046	0.902
CMI					-	0.479
治療効果						-

